

「文化力」再生の処方箋は存在するか

——シュペンングラー、シュプランガー、

シュヴァイツァーの場合——

金子 昭

はじめに

「文化力」という言葉を近年、よく見かけるようになった。それはおよそ二つの意味で使用されている。一つは国際戦略的意味、もう一つは文化行政の意味である。前者は、軍事力、経済力のよ
うな強制的に行使できるハードパワーではなく、国内外の政策
(政治力) や高度の科学技術(技術力) とならぶソフトパワーの
一環となる文化の権威や魅力を指す¹⁾。後者は、文化庁が提唱する
地域活性化プロジェクトのモットーで、「文化の持つ、人々に元
気を与え地域社会全体を活性化させて、魅力ある社会作りを推進
する力」を指す²⁾。

もし文化力という言葉を文化哲学的意味で用いるとすれば、そ
うした定義の基底になるような精神的意味で、これを位置づけ
ることができる。すなわち文化力とは、文化・文明の客観的な物
質ないし根底となる精神的・内面的な要素が及ぼし得る一種の力
のことである、と。

本稿では、シュペンングラー Oswald Spengler (一八八〇―一九
三六)、シュプランガー Eduard Spranger (一八八二―一九六三)、
シュヴァイツァー Albert Schweitzer (一八七五―一九六五)とい
う三人の文化哲学者による文化の衰退・没落に対する診立てと、
その回復・再生のための処方箋における共通項や相違点を比較考

察することで、それぞれの文化哲学の相貌を明らかにし、あわせて今日の我々をとりまく文化・文明の危機に何が提言できるか検討してみたい。

彼らを取り上げる理由とねらいは、次の点にある。

第一次世界大戦（一九一四—一九一八）前後、ヨーロッパ、とりわけその敗戦国ドイツでは未曾有の文化的危機に見舞われたが、この危機の本質をいち早く洞察し、とくに文化哲学とも言うべき文化概念を中心に据えた哲学的思想の立場から文化の回復と再生のための処方箋の検討を行ったのが、この三人の文化哲学者であったのである。彼らに共通するのは、いずれもゲーテやルソー、ニーチェなどに深い共感を示しており、広い意味での生の哲学派に属する同時代の思想家であるという要素である。ただ、彼らの文化哲学の内容は相互に大きく異なっている。

現代の文化・文明の危機感は、単にヨーロッパだけにとどまらず、全人類的な規模のものである。結論を先に言えば、これら三名の処方箋の示唆を踏まえ、文化力回復のための有効な提言を考えてみたとき、もっとも参考になるのはシュヴァイツァーによる生への畏敬の倫理思想とそれに基づく文化哲学である。

一 時代の危機意識と文化哲学の構想

第一次世界大戦は西洋文化の危機意識をもたらした。それは、近代において世界唯一の文化・文明であると自認していたヨーロ

ップが戦場になったためである。とくに敗戦国のドイツにおいてその危機はいっそう深刻だった。彼ら三人の文化哲学者はいずれも同時代人として、この危機を「文化の危機」として受けとめた。シュベングラールは、大戦終了時の一九一八年に、『西洋の没落』

第一巻を刊行（原稿は一九一四年までに完成、大戦勃発のために刊行が遅れていた）。内容からすれば、本当の標題は副題の「世界史の形態学の概要」のほうにあり、世界史全体を超絶した地点から考察しようとしている。世界史においては、バビロン、エジプト、ギリシャ・ローマ、アラビア、メキシコ、インド、中国、ヨーロッパという八つの「高度文化」がそれぞれ独立して現れ、それらはあらゆる内容的な相違を超えて、同一の構造や発展様式や運命を有している、とする。そして、今やヨーロッパの文化は他の文化と同様な没落を迎えているのだ、と彼は診立てた。彼は大学に籍を置かない孤立した思想家だったが、『西洋の没落』（タベの国 Abendland の日没 Untergang）というこの標題が時代精神を体現し、『西洋の没落』は爆発的に売れた。一九三三年にナチスが政権を取ってからまもなく孤独のうちに死去（一九三六年）。『西洋の没落』は、ナチスからは不健康な悲観主義というレッテルを貼られた。第二次世界大戦は、シュベングラールの知らない大きな文化的危機である。

シュプランガーは一九一二年に三〇歳の若さで哲学と教育学の正教授になり、一九一八年には、『文化と教育』を刊行した。この

標題からも分かるように、彼の文化哲学は教育学と深い関わりを持つている。一九三六年（昭和十一年）秋から三七年（同一二年）秋まで一年間、日本を訪れ、そこで異文化体験もしている。また、彼が日本に滞在中に行った文化哲学関係の講演八編を収録したものと、『文化哲学の諸問題』（昭和十二年）がある。これを読めば、その時代的背景からナチス政権に遠慮した物言いが随所に認められるが、彼はもともとナチスの反知性主義を暗に批判していた。彼は時代精神に抗いながら理想主義を貫いたのである。彼は、ヒトラーの暗殺未遂事件に連座したとして逮捕され、後に日本大使館の尽力により釈放された（じっさいは無害）。文化哲学に関しては、二つの大戦をはさんで多くの著作がある。初期のものとしては、『文化哲学概論（生の形式）』（一九二二年）が有名である。第二次大戦後には国家の精神的再建のために、とくに当時の初等教育機関であった国民学校に大きな関心を持ち、教育学の著作に力を入れた。この時期の文化哲学的論文としては、「文化病理学とは」（一九四七年）がある。彼においては、第一次大戦での危機感、シュペングラーとも共通する西洋文化の没落・衰退であったが、第二次大戦の際には「文化病理学とは」の標題が示す通り、西洋文化そのものが一種の病的な状態に陥っているのではないかという、いっそう強い危機意識をもっている。

異文化体験という点では、シュヴァイツァーはもっと徹底している。彼は三〇歳のとき、アフリカでの医療奉仕を志して医学部

に入り直した。医師の免許を取得後、一九一三年に当時フランス領コンゴのランバレネに渡航し、診療を開始。翌年の大戦の勃発により一時期は捕虜として軟禁状態になった（後に診療活動は再開）。一九一七年にはヨーロッパに強制送還となった。一連の文化哲学の著作活動の直接的な契機は、この戦争体験にある。彼は、一九一五年にアフリカの原生林の中で「生への畏敬」の理念に到達し、その理念にもとづいて「文化哲学」四部作の執筆を開始。一九二三年には第一部「文化の衰退と再建」、第二部「文化と倫理」を刊行した。現在では、第三部「生への畏敬の世界観」、第四部「文化と文化国家（我ら亜流者たち…改題）」も遺稿集の一環として刊行されている。

シュヴァイツァーは、すでに一八九九年、二四歳の若さのときに、ある大学関係の会合で、だれかが「なんたることだ。我々はすべて亜流者にすぎないではないか」と言ったことに衝撃を受け、このことがずっと彼の脳裏にあった。これを現代文化批判の書である「我ら亜流者たち」としてまとめようとしたが、単なる文化批判ではなく文化再建についても書かなければならないと、考え方を改めたのである。

彼は二度目のランバレネ滞在（一九二四―一九二七年）以降は、何度もヨーロッパとアフリカを往復したが、第二次世界大戦中の影響は受けなかった。彼は戦後の冷戦時代をも経験し、原水爆や核戦争の危機も深刻に意識しており、世界平和にも積極的な発言

を行った。彼は時代精神から完全に離脱すると同時に、シュペン
グラーやシュプランガーには見られないより広い世界的視野を得
ることができた。

二 文化の定義・文化と文明

文化と文明と対比させる論述法は、後者の物質優位の在り方に
対して前者の精神的境位を強調する一種のドイツ的な思考様式に
基づくもので、シュペングラーもその延長上にある。けれども、
ドイツ人が文化 Kultur と言うところをイギリスやフランスで
は文明 civilization, civilisation と言うことから、両者の区別を
つけるのはとくに意味はないと考えたのがシュプランガーであ
りシュヴァイツァーであった。

シュペングラーの文化哲学は、独自の歴史形態学 die his-
torische Morphologie の構想からなる。「文化とは、あらゆる領
域における形態言語 Formensprache の深さと厳しさが著しく
高まることを言う。かくて所屬するどの個人にとつても文化は、
この生に對して全生涯を満たす教育と教化の形をとつた、個人の
人格的―宗教的、習俗的、社会的、芸術的―教養として存続す
る」。要するに、文化は一種の生きた自然なのである。

文化の栄枯盛衰の姿は共通したものであり、「観想論 Physiog-
nomik」の視点で直観し、その理法を具体的な歴史的展開のまま
に比較し記述していくのが彼の歴史形態学である。それによれば、

どの文化も互いに他の文化から独立して誕生し、成長・發展し、
そして没落・衰亡していくという不可避的な運命がある。衰退し
た文化は文明になる。文明とは、「高度の人間種が可能とするこ
ころの、最も外的な、また最も人工的な状態である。文明は終結
である」。彼は、文化から文明にいたる大きな推移を「春夏秋冬」
になぞらえ、それを通覧した表を、インド文化、ギリシャ・ロー
マ文化、アラビア文化、西洋文化において作成している。

シュプランガーによれば、「文化とは最広義には、一部は物質
的で、一部は純粹に精神的な性格をもつた、歴史的に生成した価
値形成物の総体であり、それはそのつど生きていた人間集団に社
会的に担われたもの、つまり理解され、評価され、理想に従つて
展開されたものである。要するに、文化とは個人を超えた意義を
持つ価値及び意味の連関性であつて、それは現実のものとなつた
がゆえに現実社会の中で、動機づける作用をもつ連関性として生
きるものなのである」⁽⁵⁾。シュペングラーとは異なり、文化は単
なる有機的自然ではない。シュプランガーが手掛かりにしたのは文
化における精神性であつた。文化とは、民族もしくは一連の民族
全体の手になつた「価値創造の全体」と解され、最終的には内的
人間の文化 (cultura animi) に到達するものとした。文化は伝
統と教育の力を必要とする。それが Pfllege (養育・養成) であ
るが、文化は精神の仕事であり、また精神活動の成果である⁽⁶⁾とす
る。それでも、「文明」を人間が自然に適應する過程の技術的・

手段的な側面であるとし、これと精神的・倫理的な使命という「文化」のテロスを対比させるなど、一部でドイツの思考法を残している。

シュヴァイツァーはより一層、文化の倫理性に着目した。文化とは「個人と集合体との進歩、物質的および精神的進歩」である。ここでいう「進歩」とは生存をめぐる闘争が弱まることを意味し、そのためには理性が自然と人間の志向を支配しなければならいとする。つまり克服すべきは自然環境と内なる自然（人間本性）なのであり、これら二つを理性が支配しなくてはならない。この二つのうち重要なものは、後者、すなわち人間本性の理性的陶冶であり、これは全体や多数の幸福をめざすという倫理的な進歩に他ならない。文化の発達のためには、この倫理的な進歩が本質的な意義ある面であって、物質的な進歩はそれほどではない。また、より重要な進歩は個人の側にあり、文化の究極目標は「個人の精神的道徳的完成」である。

なお彼によれば、文化と文明の区別はない。あるとすれば、それは倫理的な文化と文明、非倫理的な文化と文明の相違である。そして正しいのは倫理的な文化（文明）概念だけである。なぜなら、非倫理的な文化概念は、結局のところ文化の没落現象を自然過程としての老化現象と捉えるからである。

三 文化の衰退およびその再生

(1) 文化の衰退

シュベングラーによれば、文化の衰退の結果、その精神的卓越性が喪失されたのが文明である。文明とは文化がその創造性を枯渇させ、生命の衰退した末期的な姿であり、世界都市が栄え、過剰に意識された頭脳人間が増え、倫理的ではあるが実用的な気風がみなぎる。文化はこれから生成し発展してゆく生きた肉体であるが、文明は生成し歴史感覚の喪失、あらゆる分野におけるデフォルメ、スポーツや賭け事、帝国主義、世界都市の発生、ジャーナリズム、実用的な世界観、出生率の低下や墮胎、大衆政治、形而上学の貧困、懐疑主義や相対主義の隆盛などのように、躍動する「魂」を失った姿である。それはいわば貴族が去り、大衆の時代になったことを意味する。ヨーロッパの文化はこうして文明へと「変質」してしまう。

一方、シュプランガーは、いかなる時代も、人間は物質的・精神的に困窮していると見るものの、現代はすべて「危機状態にある文化」であり、現代のヨーロッパは没落の危機であるという。文化没落の原因は文化の全体的均衡が破れ、客観的文化とその担い手との間に分裂が生じてくることにあるとした。それは、担い手の人間が文化を担う責任が持たなくなり、またそうした責任を放棄したからである。とくに宗教（西洋の場合はキリスト教）の

もつ永遠の価値や理想との結びつきを失うところに、文化没落の最大原因を見ている。

これに対して、シュヴァイツァーは、文化の衰退は人々がもはや文化のことを考えなくなつて、現代人の文化能力が低下したからであるとして見ている。現代人は、労働に追われて自由を失い、もはや精神を集中させることもできず、また仕事の過度の専門分化や組織化により不完全になり、また人間性を喪失してしまつた。

現代人は精神的にも倫理的にも自立性を失つてゐる。こうした現象がいまや国家レベルで起きており、それは文化国家が破産した状態であるというわけである。

(2) 文化の再生とそのエネルギー

シュベングラーは、その蘊蓄を傾けた浩瀚な歴史記述、また有機的生命になぞらえた文化観による『西洋の没落』(一九一八—一九二二年)により、ヨーロッパ文化も成長発展を遂げ、いまや老衰退の運命に服しつつあると洞察した。彼は、文化を動植物の形態やその生存になぞらえて考察し、興隆した文化もやがては没落し、死を迎えたとする。文化の再生はありえず、老いて文明となり、没落するがままなのである。彼の世界史や文化の「形態学」にみながるのは一種の論観的な気分であり、そこから有効な文化力回復の処方箋は見いだしたい。そして彼自身、そうした時代精神を形成し、自らもまたその精神の中に埋もれていた。文

化力は、彼の場合、自然的な変化になぞらえた、民族の保有する自然的なエネルギーというべきであろう。そのエネルギーがなくなれば、文化はただ衰退し没落せざるをえないのである。

シュベングラーにおいて気になるのは、世界史に現れた文化・文明をとらえる独創的で詳細な論述でありながら、文化の区分やその意味付け(文化相互の影響関係を認めないなど)には、一種異様ともいえる破天荒な解釈が目立つことだ。これが後のトインビーや現代の文明論者に批判・克服されていくところである。その意味で、彼はたしかに比較文明論の先駆者には違ひなかつた。

シュブランガーもまた、文化における有機的法則性がある程度は認めるものの、彼のほうは文化の危機を克服するための方法を主体的に模索する。彼は文化における精神的要素に着目する。

文化には四つの精神がある。¹⁵⁾その第一は「客観的精神」で、これは個人を超えたもので、一定の固定された意味をもつ。第二に「共通精神」。これは、その文化の意味についての共通理解のことであり、第三は「主観的精神」で、これはその文化を理解し、創出していく主体としての個人を指す。そして第四に「規範的精神」があり、これはどの文化共同体の中にもある文化理念、人々のより高い姿と未来の方向性を指し示す理想としての精神である。彼はこの四つの精神の有機的な再統合をはかり、これをまた教育哲学にも援用して論じる。教育とはまさに文化の担い手を教育していくことである。

教育が目指すのは精神的・倫理的革命にある。人間的・倫理的な価値定立を行い、これを実践することが重要である。彼は、西欧という建造物の中になかば眠っている精神的・倫理的な財宝に対する責任へと目覚めるべきである、と主張する¹⁶。我々は、自ら真正な自由な文化の担い手に再び変化させることを企てるべきである。文化の生命は、ひとえにその担い手の意識の成熟にかかっているからである¹⁷。それを促すことが文化の危機における処方箋となる。彼は文化力を立て直すための教育の役割にとくに大きな期待を寄せた。文化力回復の処方箋は教育学にある。

さらに、文化力はただ教育力だけにあるのではない。信仰の力にも基づくものである。それは西洋の場合、キリスト教にあると見た。キリスト教においては、現世の内容と使命が永遠なるものと結び付けられ、来世の希望は現世における力となった。人間が現世と来世に属しつつ、それに義務を負っているというところに、キリスト教の力強い文化力の源泉がある。この信仰が動揺すると共に、西洋の精神の究極的なよりどころも動揺せざるをえなかったのである¹⁸。

シュヴァイツァーは、生への畏敬 *Ehrfurcht vor dem Leben* の根源的感覚を回復するところに、文化再生の可能性を見た。実は、彼はアフリカの原生林の医師として実践するただ中から第一次大戦の危機意識を感じ取っていた。そのため、危機意識の診立ては単に西洋文化の衰退だけに対するものだけにとどまらず、よ

り根本的に人間の有する世界観の出発点から問い直すのがゆえに、あらゆる文化全体に普遍的に通じる問題提起をなすことができた。すなわち、それが生命の根源的実感に由来する倫理的覚醒としての生への畏敬だったのである。

彼は、文化の再建設のために理想主義的世界観が不可欠であると断じ、四部構成の文化哲学の中で、それこそが生への畏敬の世界観であるとして、ヨーロッパ精神史だけでなく全人類の精神史に定位してこれを徹底究明した¹⁹。文化の再生は、世界人生肯定的で倫理的な世界観を創造することにある。世界観とは、「社会や個人が世界の本質や目的について、また世界における人類や個々の人間の地位及び使命について、自らの内で駆動する思想の総体である」²⁰。なすべきことは文化世界観の創造である。文化世界観は思考する世界観でなくてはならず、そこに理性主義の意義がある。思想運動としての理性主義（合理主義）は一八世紀のものであったが、そもそも理性主義はすべての正常な精神活動の必然的な現象である。究極の知識は生についての知識であるが、我々の認識はこれを外部から看取し、我々の意志は内部から看取する。生とは思考しつつ体験されるからである。究極の知識は、このようにしてすべての人々にとって生き生きとした思惟必然的な神秘主義となる²¹。

シュヴァイツァーはこの思想を生への畏敬という形で定式化した。「外部から純粹に經驗的に定義すれば、完全な文化とは、人

間の知識、能力および社会化のあらゆる可能な進歩の教々が実現され、それらが文化本来の究極の目標である個人の内面的完成に協力するにいたることである。生への畏敬は、こうした文化観を完成し、内部からこれを基礎づけることができる。それは、人間の内的完成を内容的に規定し、それをつねに自己を深化する生への畏敬の精神性において存しめるといふことよってこれをなすのである。

彼の文化力回復の処方箋は、生への畏敬に根ざした倫理的な文化世界観を打ち立てるところに見いだされるのである。生への畏敬は、世界人生肯定と倫理をとにも含み、それは倫理的文化のあらゆる理想を思惟し意欲するもので、我々がどこまでも倫理的人間として、個々の人間や人類全体がなしあたる一切の文化を構想し意欲するようにさせるものなのである。

評 価

シュベングレーは文化を有機的な自然になぞらえて考察した。『西洋の没落』での自然的生命体の一生、あるいは四季になぞらえた見方は、文化をどこまでも客体化された運命としてとらえる見方であり、主体的契機がどこにもない。主体的契機のないところでは、倫理的・精神的な刷新の機運は生まれてくることはない。文化の危機の診断はあっても処方箋がないのである。

これに対して、シュプランガーは文化の精神的要素に着目した。

彼が教育学に文化回復の処方箋を見いだしたのは、教育が個人や世代を超えて客観的な文化（文化の財）をしかも教育者による人格的な営みによって伝えるがゆえに、まず教育のありかたを文化形成にふさわしく建て直すべきだと考えたからである。文化哲学をふまえた教育哲学を構築したところにシュプランガーの意義がある。

文化の精神的本質は、シュヴァイツァーにおいては端的に倫理的要素である。彼の文化哲学は、生命の根源的実感に由来する倫理的覚醒である生への畏敬に根ざした切り口と取り組みの姿勢を持つものとなった。彼の文化力回復の処方箋は、生への畏敬に根ざした倫理的な文化世界観を打ち立てるところにある。それは、今日のグローバルな諸問題（地球環境の危機、拡大する一方の南北格差、原理主義の台頭など）に対して、どの文化・文明に属する人間であっても共通して立脚しうる普遍的な人間性の理想を提示するものである。

以上の論述により、現代の文化・文明の危機に際して、文化力回復のための有効な提言を考えてみたとき、もっとも参考になるのはシュヴァイツァーによる生への畏敬の倫理思想とそれに基づく文化哲学であると言いうことができるだろう。

(1) この用法は、ジョセフ・ナイ、『ソフトパワー』（山岡洋一訳、日本経済新聞社、二〇〇五年）に由来する。この用法を批判的に継承

して、日本人の「生き方・暮らし方」の魅力を文化力としてアピールしたのが川勝平太『文化力ー日本の底力』(株式会社ウェッジ、二〇〇六年)である。

(2) 文化庁「文化力」プロジェクト <http://bunka-ryoku.go.jp/> を参照。これは当座の文化庁長官 河合幸雄の提唱でなされたものである。

(3) シュンランガー『運命・歴史・政治』(八田恭昌訳、理想社、昭和十五年)一六六―一七七頁。原著 *Oswald Spengler-Gedanken*, hrsg. v. Hildegard Kornhardt, 1941. 以下同じ。形態言語とは「文化の魂 Kulturseele」が外界に表現され、形態化された客観現象のついでであり、宗教、芸術、政治、経済などあらゆる文化領域が含まれる。

(4) O. Spengler: *Der Untergang des Abendlandes*, 1918, Bd. I, S.41. 『西洋の没落』第一巻(改訳新版、村松正俊訳、昭和五九年)四〇頁。

(5) E. Spranger: *Kulturphilosophie und Kulturkritik* (Gesammelte Schriften V), hrsg. v. Hans Wenke, Tübingen (Max Niemeyer), 1969, S.21(Die Kulturzyklentheorie und das Problem des Kulturverfalls, 1926).

(6) シュンランガー『文化哲学の諸問題』(小塚新一郎訳、岩波書店、昭和二十二年)六―八頁。

(7) E. Spranger: *Kulturphilosophie und Kulturkritik*, 179-180 (Kulturpathologie?, 1947). シュンランガー『文化病理学』(藤原正敏訳、昭和二十五年、トクモ新書)二〇―二二頁。

(8) A. Schweitzer: *Kultur und Ethik*. Nachdruck 1990 der Sonderaufgabe 77., München (C. H. Beck), 1990, S.35 (Der Verfall und Wiederaufbau der Kultur [Kulturphilosophie I], 1922). シュヴァイツァー「文化の衰滅と再生」(シュヴァイツァー著作集

第六巻、白水社、三三六頁。

(9) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 36. シュヴァイツァー上掲書、三三八頁。

(10) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 35. シュヴァイツァー上掲書、三三七頁。

(11) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 37. シュヴァイツァー上掲書、三三九頁。

(12) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 52. シュヴァイツァー上掲書、二六二頁。

(13) シュンランガー『人間としての在り方を求めてー存在形成の考察ー』(村田昇・山崎英則訳、東信堂、一九九〇年、一三六頁。原著 E. Spranger: *Gedanken zur Daseinsgestaltung*, hrsg. v. H.W. Bahr, 1954.

(14) E. Spranger: *Kulturphilosophie und Kulturkritik*, S.24.

(15) E. Spranger: *Kulturphilosophie und Kulturkritik*, S.183. シュンランガー『文化病理学』、二一九頁。

(16) シュンランガー『人間としての在り方を求めて』、一二九頁。

(17) 長井和雄『シュンランガー研究』(以文社、一九七三年)、一八二頁。

(18) シュンランガー『文化哲学の諸問題』、二五七―二五八頁。ただし用語を少し改変した。

(19) シュヴァイツァーの文化哲学全体は、この意味で一種の「世界哲学」の相親を有している。金子昭「シュヴァイツァーにおける世界哲学の構想」『比較思想研究』第二九号、二〇〇二年、九七―一〇四頁を参照。

(20) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 63. シュヴァイツァー上掲書、二七九頁。

(21) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 67. シュヴァイツァー上掲書、二八五頁。

(22) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 70. シュヴァイツァー上掲書、二八九頁。

(23) A. Schweitzer: *ibid.*, S. 354 (Kultur und Ethik [Kulturphilosophie II], 1922). シュヴァイツァー「文化と倫理(文化哲学第二編)」(シュヴァイツァー著作集第七巻)、三三三頁。

(かねこ・あきみ) 倫理学、天理大学おやさと研究所教授)